

外国せいの機械から学ぶ

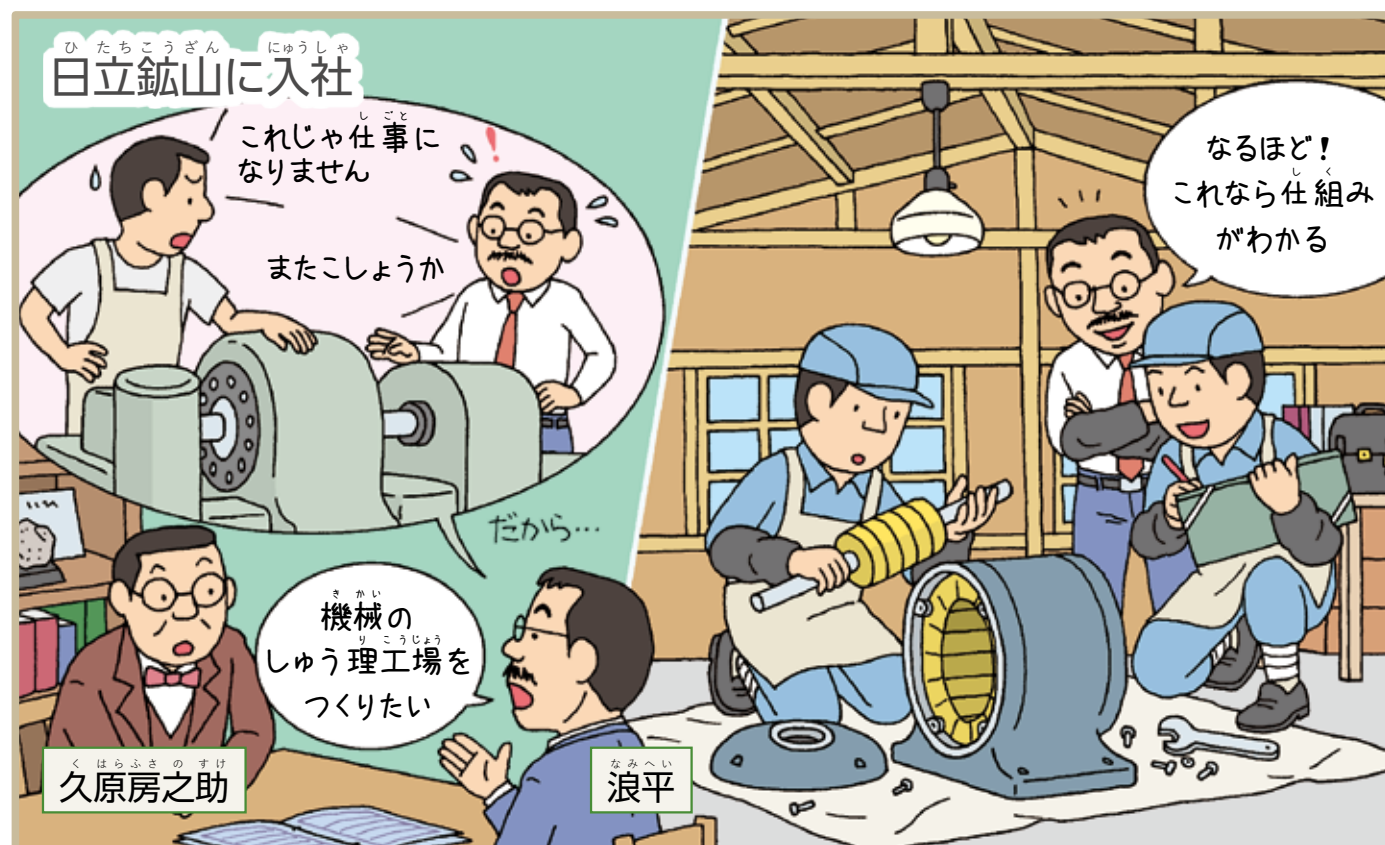


「たとえどんなに苦勞をしても、外国にたよらず、自分で使う機械は自分でつくる！」
強い決意をもって、浪平は、1906年（明治39年）、久原房之助が社長を務める久原鋳業所（今のJX金属）日立鋳山に工作課長として入社しました。

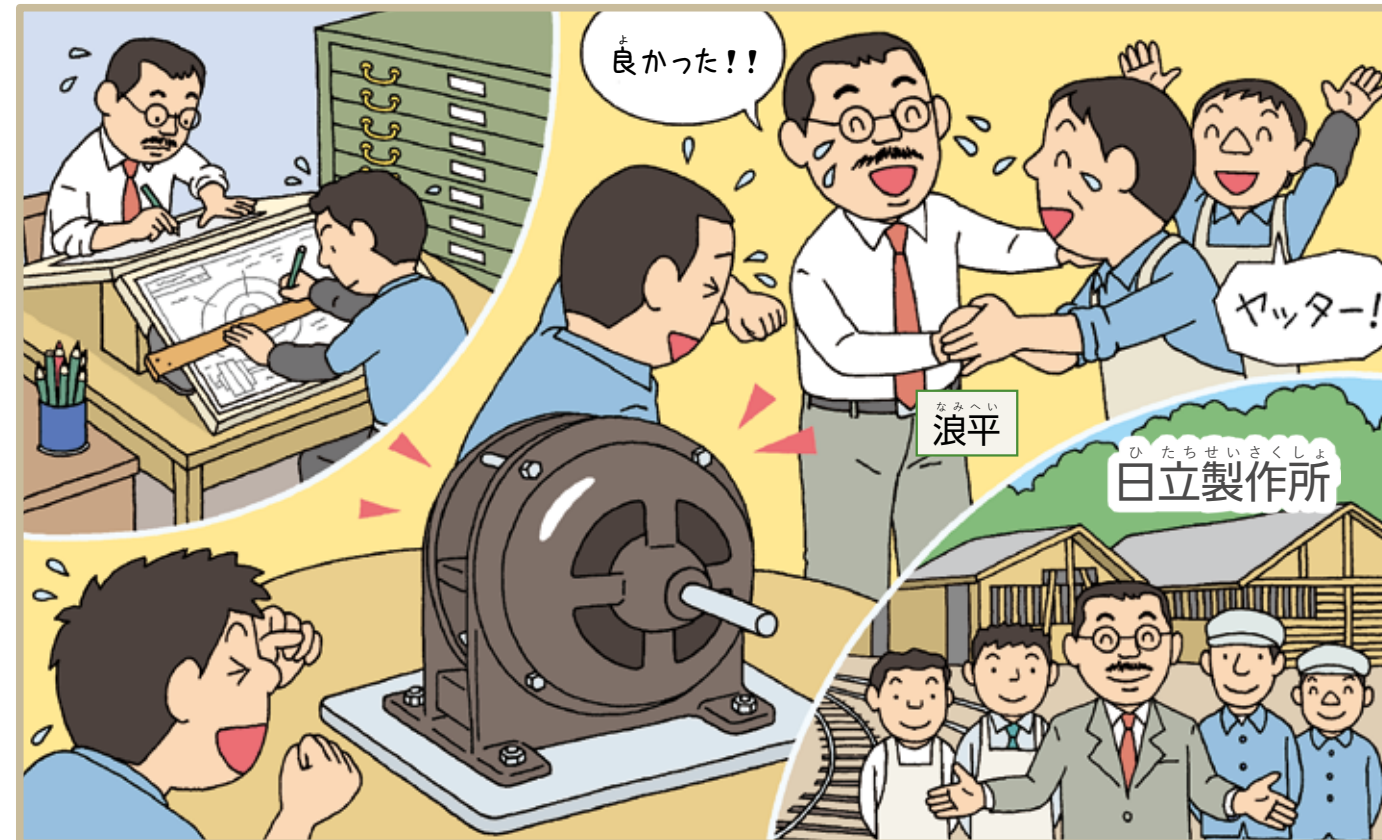
浪平はすぐに仕事を始め、次々と新しい発電所を完成させます。電力がふえて、鋳山の開発が進み、銅がたくさん取れました。すると、使いすぎによる機械のこしょうもふえていきました。

外国せい機械の会社にしゅう理をたのむと、時間もお金もかかります。そこで浪平は、久原に「機械を直す工場をつくりたい」と伝えます。「こわれたらしゅう理に出せばいい」という久原に対し、浪平は「機械を自分たちの手で直せば仕事が早くなる」とうったえ続け、とうとう「しゅう理工場」がつくられました。それは鋳山の一面にある小さな小屋でした。

そんなしゅう理工場には次々とこわれた外国せいの機械がとどきます。これまで一度も自分たちで直したことがないため、わからないことだらけです。それでも外国せいの機械を分かちし、こわれた原いんをさぐって直していくことで、少しずつ電気機械に関する知しきやぎじゅつが身についていきました。「そろそろ自分たちの手で機械をつくれるかもしれない」。浪平のなかにそんな自信が生まれました。



純国産の5馬力モーターの完成



ある日浪平は、工作課の仲間に「われわれの手で5馬力モーターをつくろう」と声をかけました。国産モーター開発への挑戦です。しかしそれは楽な道のりではありませんでした。何度も失敗をくり返し、それでもあきらめずに挑戦し続けた結果、1910年（明治43年）3月、ついに5馬力モーターが完成します。純国産モーターのたん生です。

浪平は久原に、機械のせい作工場をつくりたいとたのみます。「外国せいの機械を使えばいい」という久原に対し、浪平は「日本人が使う機械は日本人がつくるべきだ。われわれもその力をつけてきた」とあきらめません。浪平の熱意に打たれた久原は、1910年（明治43年）、機械づくりのための工場を建てることをゆるします。小さな小屋から始まった浪平の挑戦が、大きな工場に発展しました。

「これからは鋳山で使う機械は部品から全て自分たちでつくろう」

決意も新たに日立製作所が動き始め、機械づくりのための新しい工場も完成しました。「日立製作所」とは日立村の地名から名づけられました。

教えて！とち介

★モーターって？

電気の力を機械が動くための力に変える機械だよ。せいぞう業ではほとんどの機械にモーターが使われているし、身近なところで洗たく機やそうじ機、エレベーターなどにも使われているよ。今や生活になくてはならない存在なんだ。

